

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱水産雑誌第六二七号
平成三十年四月一日発行（第百二十一卷第四号）

ホトトギス

四月号



風雅の小筈〔四〕

廣 太 郎

稲畑汀子名譽主宰も申しているように、花鳥諷詠の俳句とは「五・七・五の十七音で季題を詠む詩」であるという事は私も信じて疑わない。この「十七音」をよく「十七文字」と表現されるが、文字だと十七と限らないので、この場合は「音」の方が良いだろう。まあ細かい事はともかく、今月は、この言葉の中の「詩」について思った事がある。

毎年十二月に兵庫県伊丹市にある柿衛文庫で行われる「鬼貫青春俳句大賞」という、三十歳未満の投句を対象とした公開選考会に昨年平成二十九年に選者で伺った時、新幹線を新大阪駅から在来線に乗り換えて伊丹へ向かう時、丁度隣には父親と幼い娘が並んで座っていた。父親は一所懸命スマホを操作していて、自分の世界に嵌り込んでいる。ふと娘が父親に「なあ、人間て、人形に魔法をかけてなったもんやねんで」と突拍子もない事を言った。父親は相変わらずスマホを操作しながら「魔法なんて無いねんで」と素っ気ない言葉を返すのみだったが、私自身この突拍子もない事を言った娘の言葉に何故か詩情を感じたのであった。ある俳句のシンポジウムに参加する機会が時々あるが、伝統俳句を論じているそのシンポジウムは、最初は季題について、そして回を重ねるに従って五・七・五の所謂定型について、そしてここ数年は各国の人の宗教観についてまで論じ合っているようだ。勿論写生は基本であるが、そこから詩情をどれだけ感じさせる事が出来るかというのも課題の一つではないだろうか。

句日記 汀子

平成二十九年四月一日 芦屋ホトトギス会

入れ替る人事 弥生の心もて
草餅や甘さひかへ目とは言へど
まだ花の固しといへどこの人出
予定には加はらずとも桜かな
四月二日 下朝句会

日帰りの上京にして日永かな
一と工夫また一工夫日永かな
病状の一喜一憂とて日永
人数の余分に買ひぬ 桜餅
四月三日 ロイヤル俳壇

やうやくに桜はころび初めにけり
沈丁の花の所在は問はずとも
亀鳴くや自分の時間別しむる
春の空仰ぎ大地を踏みしむる
亀鳴くや書きはじめたる写生文
四月四日 有恒俳句三百号記念句会

花冷を覚悟の舟に乗り込みぬ
大川の桜 見る舟出航す
これよりの花の堤の遅速見て
咲き増ゆる刻々花の大川に
水に触れさうに堤の花の枝
大川の浮かべて花見舟となる
満開の花の一樹も加はりぬ
四月八日 虚子忌

山会を世に問ふ虚子忌なりしかな
幾年を花の忌日として侍る
四月十一日 大阪倶楽部

うららかにあてもの忘れせしやうな
その所在こんなとこりにチューリップ
今やつと所在を告げてチューリップ
気がつけばまだ明るくて春の暮
こんなにも植ゑてをりしかチューリップ
まだ蝶も見かけぬことも風荒し

四月十一日 綿業倶楽部

目覚めたる大地桜の中にあり
囀に庭の一劃明け渡す
薄墨にはじまる庭の花の日々
今よりには桜の道と申すべし
咲くまでは忘れてをりし桜かな
四月十三日 清交社

雲いづも東へ流れ春の空
心いまくつろぐ時間長閑かな
大地傾けて遠景芝桜
芝桜越しに弾みてゐる会話
春の空日帰りの旅一とまたぎ
上ばかり見て芝桜踏んでをり
四月十四日 工業倶楽部

春暁や今日は今日又明日は明日
桜には同じ心のなかりけり
震災を機に植ゑしてふ花の道
旅心吉野の桜へと向かふ
みよしのの山路の花へ旅心
四月十五日 吉野山くつろぎの旅

吉野への花の旅路と申すべく
世の中がたちまち花に彩られ
花の山俳句ですかと問はれけり
道すがら声かけ合ふ花心
今宵泊つ花の吐息に包まれて
さういへば春告鳥を聞かざりし
上ばかり見て足許の落花かな
第二句会

みよしのの花の心の中にをり
夜桜の許で聞きたるよき話
夜の句会この春灯を明うせよ
睡る花眼ら庭の花賜り
四月十六日 くつろぎの旅第三句会

夜桜に包まれ旅寝の深かりし
黄檗林花の吉野を彩れる
花冷を閉ざす玻璃戸の明るさよ

木々芽吹くものに吉野の別れあり
第四句会

四月十八日 無名会
春暁のもう一と眠りするまいか
みよしの野の旅も腫となりけり
臘夜の思ひちがひといふことも
稿債をかかへて出掛けたる臘
四月十九日 夏潮句会

チューリップ風の狼籍ありにけり
チューリップ活けて命をながらへし
稿債を果たせしよりの日永かな
何時の間に咲きしや風の白牡丹
みよし野で別れ来しより日永かな
又会ふも日永の旅路なりしこと
四月二十一日 句会と講演の会

百千鳥一人住まひを覗かれし
春日傘一寸おしやれな人通る
快晴となりしと今日は春日傘
みよし野の旅も終りぬ百千鳥
稿債の一つ仕上げぬ百千鳥
四月二十七日 きざらぎ会

皆同じ心を抱きぬ花曇
旅終へて風の狼籍花曇
その辺に巢のあるらしき音と虫
蜂飛んで花圃の所在と知られけり
四月二十七日 アネモネ句会

消息に一喜一憂蝶の昼
稿債に残る句日春の宵
一歩又一歩春光又一歩
蝶飛んでやうやく大地ゆるみけり
癒ゆる日待つ心切蝶の昼
四月二十八日 時雨句会

行春の一日と思ひつつ灯す
みよし野の旅の名残の花衣
行春の今日もあしたもあさつても

廣太郎旬帳

廣太郎

平成二十九年四月一日 菅屋ホトトギス会

草餅に練り込まれたる野の息吹
昨夜鯉を料り弥生の猛虎かな
江戸撰津花を紡ぎし鉄路かな

四月二日 野分會青屋例会

餡の艶葉の艶椿餅の味
葉を剥がすより椿餅香り立つ

四月二日 青嵐會青屋例会

年尾展時を忘れて春の宵
鯛網に狭められゆく命かな
鯛網や神の舞ひたる鞆ノ浦
先づワイン選びしよりの春の宵

四月四日 カトリック新聞選者吟

列福を寿ぎ地虫穴を出づ

四月六日 蕉心会

角曲るより花万朶花浄土
渦巻いて落花は江戸の空狭め
四本の竿微動だにせざうらら
屋形船水上バスも花見船
花見船吃水低く客溢れ

四月八日 虚子忌

ホ誌販ぎ三十五年虚子祀る
新しき花の未来や段葛

四月十日 朝日カルチャー若草旬会

桜鯛声はみ出して耀られゆく
春昼や都庁は天を目指すかに
春昼の空を突き刺す摩天楼
桜鯛鳴門の渦に磨かれて
花屑の点描として
花の雲輪郭模糊と副都心

四月十三日 土筆会

初花に山の表情緩びゆく
春日傘閉ぢる姿も令夫人
初花や江戸の歳月重ね出す
一匹は親猫の視野はみ出して

四月十四日 北國文芸選者吟

落花舞ひ上げて雀の降り立ちぬ
四月十五日 吉野くつろぎの旅

散りたくて満開となる桜かな
一片が蝶となりゆくまでの侘
花見茶屋朽ちて花鳥の一部分
花人といふみよし野の一詩人
如意輪寺一氣に上りゆくうらら

一片の落花浴ぶより寿
千人は明日の復活祭の為
花人に標高下がりゆく吉野

みよし野の聖土曜日の花の精
その中に忠彦加へ花の精
寝惜しみて花の吐息を聞く泊り
星眠りゆくより目覚めゆく桜

亀鳴くや蔵王堂徒歩十五分
八重枝垂山桜大交響詩
イースターエッグめく出し巻き卵

四月十六日 新廣會スカクリンク

花は吉野華は京都の舞妓かな
宝塚らしきも都踊見
杞陽来よ都踊は今佳境
落花舞ふ五重塔を越えたくて
はんなりと来て麗かに舞ふ舞妓
古都に京に花人となる三日間
終の色風に放ちて落花舞ふ
一篇の詩は一片の落花より

四月二十日 登高会

仏縁に句縁に花の縁かな
春灯下ピノノワールのルビー色

桜葉降りて来年の開花へと
桜葉降りて生活の戻る街
惜春の旅絶景にも慣れ春惜む
新しき生活にも慣れ春惜む

四月二十二日 ホトトギス社旬会

外つ国へ嫁ぎし妹や百千鳥
桜葉降る街騒を吸ひ込みて
対談を終へし安堵や百千鳥
東京 都港区 区に森百千鳥

四月二十三日 青嵐會東京例会

桜葉降る華やぎの記憶載せ
うららかに大寺の屋根反り返る
亀鳴くや俳句を世界遺産にと
チューリップ日を弾く青吸ひ込む黄

四月二十三日 野分會東京例会

葉の艶に拘る老舗椿餅
謂れ無き少女の像に柳絮飛ぶ
柳絮舞ふ銀座に観世能舞台

四月二十五日 若水旬会

紫は神の存問諸葛菜
安政と書かれし杖も遍路宿
菓ゆる八百年の時空超え
鳥語聴く人語聞かざる遍路かな
実朝を知る大銀杏菓ゆる

四月二十六日 目黒学園旬会

桜葉青き地球に赤く降る
蜂の巢の駆純に総出の村役場
桜葉降る純白のマリア像
教会の尖塔蜂の巢の天下
連翹に取り残されてゐる羽音

四月二十八日 徳源寺旬会

線香に烟る円空仏うらら
線香に尾張の風に包まれて
春惜む尾張の風に包まれて
楚々と咲く躑躅も堂の華やぎに

雑詠 廣太郎 選

桐一葉音なく落ちて音ありし 熱海 嶋田一步
 桐一葉落ちたることに富士見えし 同
 妻は煮て夫は焼いて雑煮かな 東京 橋本くに彦
 風ひとつ水仙の香を盗みをり 同
 名園の鯉大寒の底の底 同
 力学のせめぎ合ふ都市小六月 神戸 千原叡子
 ブロンズのトランペッター冬に入る 同
 服を着る犬を見てゐる猫小春 同
 菩提子の零るる札所寺の門 同 後藤比奈夫
 種の浜思ひて蒐め萩の塵 同
 皆が詠む萩に隠るる百度石 同
 柘の挿しある寄席の二階席 同 和田華凜
 神農の虎の後ろは振り向かず 同
 赤門を出ておでん屋に集りぬ 同
 玄関に這入りたがつてゐる木の葉 長岡 安原 葉
 魚沼の晴れし山野や冬耕す 同
 大会に思ひ馳せ病む冬日和 同

霜月の風吹くフェリー乗り場かな 神戸 山田佳乃
 夕暮はいつも祖父ゐる大根畑 同
 冬菊を生けて一つとなる香 同
 水洩漢やめんこのらくろズック靴 同 藤井啓子
 新婚のひと間ま白き障子かな 同
 冬木の芽まだまだ君は伸び盛り 同
 照り翳りとは綿虫の見え隠れ 東京 田丸千種
 数へ日やピルを溢れ落ちさうな灯 同
 炬話やあの世この世を隔てなく 同
 鳥帰る高さに淡き月の影 同 今井肖子
 銀の枝太く牡丹の芽の赤き 同
 休日の音に混ざりてさへづれる 同
 終日の連日となる落葉搔 袋井 湖東紀子
 湖に綺羅をこぼして初時雨 同
 一日の光と影の過ぐ障子 同
 茶の花の金を浮かべて盛りなる 龍ヶ崎 今橋眞理子
 頼りなき煙まづ上げ焚火かな 同
 東京の人早足に小春日も 同
 命みな色を持ちをり山の秋 渋川 木暮陶句郎
 上弦の月の舟浮く八ヶ岳 同
 陶土練る影の重さや暮の秋 同
 人立たすより寒林のなほ寂し 同
 蒲公英の隠れやうなく帰り咲く 香川 湯川 雅
 浮びきし鳩に湖心といふ標 同

雑詠句評(三月号より)

鉦叩聞けばすぐ来る七回忌 朝倉 井上醇女

作者のご夫君井上弘堂さんは、年尾先生の三十三回忌に当たる平成二十三年十月二十六日の年尾忌には何としても詣らねばならぬと、やや体調を崩された身ながら作者と共に、鎌倉寿福寺の年尾忌に出席された。法要が済んだ午後の句会の最中に倒れられて救急車で病院へ搬送され入院された。鎌倉での入院のあと地元に戻られ、十二月三日に八十四歳の生涯を閉じられたのであった。平成二十九年の十二月三日は弘堂さんの七回忌である。

秋の深まるにつれてチンチンと鉦を叩くように鳴く鉦叩の美しい音色が聞こえて来る中で、近づいてきたご夫君の七回忌を迎える作者の心情がいたく伝わって来る句で、余韻も深い。(葉)

最愛の御主人井上弘堂様が亡くなられたのが平成二十三年十二月三日で、平成二十九年で丁度と回忌という事になるだろう。十月二十六日の年尾忌の直ぐ後の御恙となり、丁度秋の冷えがつの頃で、鉦叩の声もうら悲しく聞こえる頃である。季題を通して故人を偲んでおられる姿がしみじみと伝わる。(廣太郎)

初紅葉ここにもありし渡月橋 神戸 後藤比奈夫

渡月橋は京都の名勝地の一つであり有名なところである。この句はその渡月橋の初紅葉を見た時に「ここにもありし」の一語が生まれたものと思われる。名所の俳句を名所のままに詠むことは練達の作者でないとい詠めないが、さすがの一句として味わうことが嬉しい。(保佳)

有名な京都の渡月橋ではなく、何処か別の場所にある同じ名前の橋なのだろう。富士山をはじめ、本家にあやかっつて、というのも語弊があるのかも知れないが、名所の名前は他の場所でも使われているケースは多い。初紅葉の美しさに、京都の絶景を重ね合わせている作者である。(廣太郎)

天地有情

まづは朴落葉拾ひて庭掃除
 吹かれきし落葉とどまる処なし
 山陰に解く山陽の暑さかな
 風蘭に搦め捕られし一古木
 敬老の日の銀盃が総理より
 濁酒酌まな銀盃届きたる
 寄鍋や今夜は雪の降りさうな
 砧打つ音の今昔変らざる
 高僧も人の子風邪を召されしと
 妻遣したる秋日傘何本も
 思ひ出を語り合ふ人なき寒さ
 灯の下に十一月の色の薔薇
 お精進なれど粕汁具だくさん
 粕汁に新発意頬を染めにけり
 遙かなる稜線に秋惜みけり
 六十を早逝といふ初時雨
 天帝の氣息にとべる落花かな
 日に燃えて翳れば愁ふ牡丹かな

長岡 安原 葉
 同 同
 東京 稲畑廣太郎
 同 同
 神戸 後藤比奈夫
 同 同
 同 和田 華凜
 同 同
 相模原 木村享史
 同 同
 東京 今井千鶴子
 同 同
 神戸 三村 純也
 同 同
 熊本 岩岡 中正
 同 同
 福山 竹下 陶子
 同 同

空白のなきこと自負に日記果つ
 古日記看取の日日もなつかしく
 冬帝は海上都市を総べ給ふ
 散紅葉 其は霽月の孫娘
 霜焼にまほらでありし手湯足湯
 抜けるとはまだある証拋木の葉髪
 暗くなるまで石に坐し秋惜む
 色鳥来さて何鳥と問はれても
 静けさの降り積りゆく落葉かな
 落し物めきて一枚朴落葉
 秋晴れて宇宙の果を眺めをり
 旬の柿食べ若かりし子規偲ぶ
 雪片の現れ来ては消えにけり
 さまよへるわれ雪片と異ならず
 この庭の春秋を詠み落葉踏み
 思ひ出の遡りゆく落葉道
 三月の日差のうすくゆきわたる
 峡の朝みづいろといふ春の色

金沢 藤浦 昭代
 同 同
 神戸 千原 叡子
 同 同
 宇佐 熊禁御堂義昭
 同 同
 神戸 浜崎素粒子
 同 同
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同 同
 吹田 大橋 暁
 同 同
 群馬 中杉 隆世
 同 同
 宝塚 水田むつみ
 同 同
 東京 今井 肖子
 同 同

日子選